

12



池田卓氏は平成2、3年夏の甲子園で2年連続準優勝の沖縄水産高校野球部をテレビで見ると、壁当てとバットの素振りに熱を込めた。中学3年時、同級生不在の船浮小中学校から野球部がある船浮中学校へ転校し4番でエース。「山を駆け海での遠泳が効いた。希望が叶い沖縄水産へ進学。「前後は甲子園出場、僕達の代は春の九州

「島の人よ」を生きる

シンガーソングライター
竹富町観光大使

いけだ すぐる
池田卓氏

(40)



大会、夏の県大会決勝で涙を吞んだ。

大学2年時に島の砂浜芸能祭でオリジナル曲「島の人よ」を披露。「ステージで歌っている野球のマウンドで投げているように気持ちがいい。『CDは?』と言われ歌手に」。

その後、アルバム「心色」で全国デビューし、中東や北米、欧州、中国と海外でも活動。この間、船浮での音楽イベント「船浮音祭り」を開始、毎年600人近くを集める。

池田氏は船浮海運と民宿ふなうき荘オーナーの父親の背中を見て育った。「船の操縦、猪猟、電気・水道工事とオールマイティー。祭りにも率先して取り組む姿に憧れた。島の人には誰も勝てない」。両親の子育ても絶妙。「離島・島嶼の子供達は『15の春』、高校入学とともに島を出る。小学生までは毎日のように叱られたが、中学生になると『お前は大人だ。自分で判断して決めなさい。人に迷惑を掛けなければいい』と言われ自覚が芽ば

えた。船浮中への転校も尊重してくれたが、

当時公民館長兼PTA会長の父親、小学校教諭の母親の奔走で廃校を免れたと成人式で聞いた。今、池田氏には小学生の長女と未就学の長男がいて「明るい子であれば」と話す。

最後に船浮への想いを語ってくれた。「村の元気イコール学校の存続。若者の住む場所と仕事が必要。環境省の崎山湾・網取湾自然環境保全地域の珊瑚礁スノーケリングは当初『卓ツアー』を考えたが、個人の名は未来永劫でないので『じゃじゃまるツアー』にした。

将来、4艇をフル出航させたい。豊年祭のための稲作、物産としてハチミツやコーヒークりに取り組む。民宿を改装し、広いフリースペースに強力なWi-Fiを導入、若者を雇いツアーだけでなくエステなど豊富なメニューでお客さんにくつろいでもらいたい。池田氏は「島の人よ」の歌詞「この島に芽生え、この島に散る」を生きている。